

グリーンツーリズム 先進地・安心院でシンポ

修学旅行頼み集客厳しく

「バカンス法」望む声

都市との交流で農漁村を活性化させる滞在型レジャーの取り組み、グリーンツーリズム(GT)。九州一円の実践者が集う「九州GTシンポジウム2010 in 大分」(九州のふたたび応援団、NPO法人大分グリーンツーリズム研究会主催)が10、11両日、大分県宇佐市安心院町で開かれた。テーマは「観光と農の連携」。その社会環境を整えるため、長期継続休暇を取得できるようにするバカンス法の必要性を訴える声も上がった。(上野洋光)

シンポの会場となった安心院は、1990年代から始めた、普通の農家に客を迎え入れる「農村民宿」(農泊)で知られ、GTの先進地と評される。た、立役者の一人、大分県GT研究会の宮田静一会長は、議論の中で「今は修学旅行で手もたが来て、何とかなっているが来夏」と、厳しい認識を示した。

土のにおいをいとおしみ、取れたて野菜の料理に浮かぶ旅行者の笑顔と、受け入れ側

バカンス法

1936年、フランスが農漁民を対象として全労働者に年2週間の有給休暇を保障する「マイニヨン法」(通称バカンス法)を制定。現在、ILO(国際労働機関)のガイドラインに基づき、フランスでは12、24日間、ドイツでは最低12日間の継続休暇取得が会社側に義務付けられている。日本の年次有給休暇の平均支給日数は16日で取得率は47%。すべて利用されればサービス・観光業の雇用創出にもつながり、経済効果は1兆円との試算もある。大分県議会が2003年に「バカンス法の制定を求める意見書」を議決して政府に提出したが、全国的な議論にはなっていない。



年中おいしい水がわき出る寒水集落で、農村民宿「湧水郷」(こみりの里)を営む江藤千代子さん(左)、勝郎さん(中央)、千代子さんの姉の礼子さん



江藤千代子さんの手作り郷土料理が並んだ食卓

グリーンツーリズム活動の先進地・安心院。農泊に取り組み農家は現在64軒、修学旅行生年間1万人を受け入れる。実践者の一人、江藤勝郎さん(66)と千代子さん(70)夫妻の自宅に体験農泊してみた。

もてなし

水郷「こみりの里」とを引けて受け入れを始めて5年、オノは千代子さんと、勝郎さんは車で送迎。山菜採りや竹細工で来客をもてなす協力者だ。

この日は大人4人がお世話になった。風呂から上がった後、卓上には千代子さんの手作り郷土料理が並ぶ。「買ったのはビール、おでんの厚揚げとこんにゃく、残りは全部このあたりで採れたものよ」

「親戚」として

記者が農泊体験

地元でササバと呼ぶ珍しいキノコの油いため。近くの山で掘り出したばかりの自然薯。川で捕まえたカニを惣菜店から買って作る「二汁」(フナ、真竹、高菜)。お酒にもご飯にも合う品々。仲づまじい入交えを繰り返す。深みが続く。

地元のササバと呼ぶ珍しいキノコの油いため。近くの山で掘り出したばかりの自然薯。川で捕まえたカニを惣菜店から買って作る「二汁」(フナ、真竹、高菜)。お酒にもご飯にも合う品々。仲づまじい入交えを繰り返す。深みが続く。

大地と海と



歳末を控えたこの時期、あちこちの農家の軒下には、オレンジ玉のすたれ」のようなし柿が下がっていた。販売用にする農家もあるが、わが家はほとんど自家消費。晩秋の夜、家族そろって、さんさんの渋柿の皮むきをするのが楽しかった。つるつる数日たつと、

がある欧州では、都市住民が農村でリラックスし、農村の雇用を創出している。補助金を渡す、農村を自立させ、日本全体を活性化させるのに有効な手段だと訴えた。

安心院の取り組みは元来、欧州の農村の取り組みに学んだという。兼父さんも「もつ」と多くの都市部の消費者を取り込めれば、GTの目的である農村が自立できる産業構造

がつくれる」と語る。わが国でも観光庁が休暇事情改革の道を探っている。GTを含めたレジャー環境の在り方は、もう少し真剣に議論されていい。

隠れてしたことか許せない。止めなかつた友人も含め「連帯責任だ」と荷物を片付けて帰るよう命じた。生徒たちは話し合っただけで穴を埋め直し、謝罪。張本人たちは別

「あ、うすうす涙を浮かべていたという。勝郎さんは韓国語を学んでいたという。またいらっしゃい」。そんな言葉で送り出された。